

文づかい

森鷗外

青空文庫

それがしの宮の催したまいし星が岡茶寮のドイツ会に、洋行がえりの将校次をおうて身の上ばなしせしときのことなりしが、こよいはおん身が物語聞くべきはずなり、殿下も待ちかねておわすればとうながされて、まだ大尉になりてほどもあらしと見ゆる小林という少年士官、口にくわえし巻煙草取りて火鉢の中へ灰ふり落して語りははじめぬ。

わがザツクセン軍団につけられて、秋の演習にゆきし折り、ラアゲウイツツ村のほとりにて、対抗はすでに果てて仮設敵を攻むべき日とはなりぬ。小高き丘の上に、まばらに兵を配りて、敵と定めおき、地形の波^{なみづら}面、木立、田舎家^{いなかや}などをたくみに楯^{たて}にとり

て、四方よもより攻め寄するさま、めずらしき壯觀ものみなりければ、近郷
の民うどここにかしこに群れをなし、中にまじりたる少女おとめらが黒天鵝びろ
絨うとの胸ミイデル当晴れがましゆう、小皿こざら伏せたるようなる縁ふちせまき笠かさに
艸くさばな花さしたるもおかすと、たずさえし目がね忙いそがわしくかなたこ
なたを見めぐらすほどに、向いの岡なる一群れきわ立ちてゆかし
ゆう覚えぬ。

九月はじめの秋の空は、きようしもここにまれなるあい色にな
りて、空気す透すきとおりましたれば、残るくまなくあざやかに見ゆるこ
の群れの真中まなかに、馬車一輛とどめさせて、年若き貴婦人いくたり
か乗りたれば、さまざまの衣の色相映じて、花一叢そう、にしき一団、
目もあやに、立ちたる人の腰シエルペ帯、坐りたる人の帽のひもなどを、

風ひらひらと吹きなびかしたり。そのかたわらに馬立てたる白髪おきなつのの翁は角ボタンどめにせし緑の獵人服かりうどふくに、うすき褐かちいろの帽を
 いただけるのみなれど、なにとなく由よしありげに見ゆ。すこし引き
 下がりて白き駒控こまえたる少女、わが目がねはしばしこれにとどま
 りぬ。鋼鉄はがねいろの馬のり衣裾ごろもそなが長ながに着て、白き薄絹巻きたる黒帽
 子をかぶりたる身の構えけだかく、いまかなたの森蔭より、むら
 むらと打ち出でたる獵兵の勇ましき見んとて、人々騒げどかえり
 みぬさま心憎し。

「殊ことなるかたに心とどめたもうものかな」といいて軽くわが肩を
 うちし長き八字髭ひげの明色なる少年士官は、おなじ大隊の本部につ
 けられたる中尉にて、男爵フォン、メエルハイムという人なり。

「かしこなるはわが識れるデウベンの城のぬしビュロオ伯が一族なり。本部のこよいの宿はかの城と定まりたれば、君も人々に交わりたもうたつきあらん」といいおわるとき、獵兵ようようわが左翼に迫るを見て、メエルハイムは駈け去りぬ。この人とわが交わりそめしは、まだ久しからぬほどなれど、よき性さがとおもわれぬ。

寄せ手丘の下まで進みて、きようの演習おわり、例の審判も果つるほどに、われはメエルハイムとともに大隊長の後しりえにつきて、こよいの宿へいそぎゆくに、中なかだか高たかにつくりし「シヨツセエ」道美しく切株残れる麦畑の間をうねりて、おりおり水音の耳に入るは、木立のあなたを流るるムルデ河に近づきたるなるべし。大隊長は四十の上を三つ四つもこえたらんとおもわるる人にて、髪は

まだふかき褐いろを失わねど、その赤き面おもてを見れば、はや額の波
 いちじるし。質樸なれば言葉すくなきに、二言三言めには、「わ
 れ一個人にとりては」とことわる癖あり。にわかにもエルハイム
 のかたへ向きて、「君がいいなずけの妻の待ちてやあるらん」と
 いいぬ。「許したまえ、少佐の君。われにはまだ結いいなずけ 髪いの妻と
 いうものなし」「さなりや。わが言ことをあしゆう思いとりたもうな。
 イイダの君を、われ一個人にとりてはかくおもいぬ」かく二人の
 物語する間に、道はデウベン城の前にいでぬ。園をかこめる低き
 鉄てつ柵さくをみぎひだりに結まいし真砂路まざろ一線に長く、その果つるとこ
 ろに旧ふるりたる石門あり。入りて見れば、しろ木もく樅げの花咲きみだれ
 たる奥に、白しら聖つち塗ちりたる瓦かわ 葺らぶきの高どのあり。その南のかた

に高き石の塔あるはエジプトのピラミイドにならいてつくれりと
覚ゆ。きよようの泊りのことを知りて出迎えし「リフレエ」着たる
下部しもべに引かれて、白石はくせきの階きざのぼりゆくとき、園の木立を洩もるゆ
う日朱のごとく赤く、階の両ふたがわ側がわにうずくまりたる人首じんしゆしん獅身の
「スフィンクス」を照したり。わがはじめて入るドイツ貴族の城
のさまいかならん。さきに遠く望みし馬上の美人はいかなる人に
か。これらもみな解なぞきあえぬ謎なぞなるべし。

四方よもの壁と穹窿まるてんじようとには、鬼神きじんり竜蛇りようださまざまの形をえが
き、「トルウヘ」という長櫃ながびつめきたるものをとどころどころにす
え、柱には刻みたる獸こうべの首ことうべ、古代たての楯たて、打ち物などをかけつらね
たる間、いくつか過ぎて、楼上ろうじやうにひかれぬ。

ビュロオ伯は常の服とおぼしき黒の上衣のいとひろきに着かえて、伯爵夫人とともにここにおり、かねて相識れるかなれば、大隊長と心よげに握手し、われをも引き合わさせて、胸の底より出ずるようなる声にてみずから名のり、メエルハイムには「よくぞ来たまいし」と軽く会釈しぬ。夫人は伯よりおいたりと見ゆるほどに起居重たちいけれど、こころの優しさ目まみの色にいでたり。メエルハイムをかたわらへ呼びて、なにやらんしばしさやくほどに、伯。「きよようの疲れさぞあらん。まかりて憩いこいたまえ」と人して部屋へいざなわせぬ。

われとメエルハイムとは一つ部屋にて東向きなり。ムルデの河波は窓の直下のいしずえを洗いて、むかいの岸の草むらは緑まだ

あせず。そのうしろなる柏かしわの林にゆう霽もやかかれり。流れめての方にて折れ、こなたの陸膝くがひせがしらのごとくいでたるところに田舎家二三軒ありて、真黒なる粉ひき車の輪中なかぞら空にそびえ、ゆん手には水にのぞみてつきだしたる高殿の一間あり。この「バルコン」めきたるところの窓、うち見るほどに開きて、少女のかしら三つ四つ、おりかさなりてこなたをのぞきしが、白き馬にのりたりし人はあらざりき。軍服ぬぎて鹽たらいづくえ卓たのそばへ倚よらんとせしメエルハイムは、「かしこは若き婦人がたの居間なり、無礼なめなれどその窓の戸疾とくさしてよ」とわれに請いぬ。

日暮れて食堂に招かれ、メエルハイムとともにゆくおり、「この家に若き姫たちの多きことよ」と問いつるに。「もと六人むたりあり

しが、一人はわが友なるフアブリス伯にとつぎて、のこれるはいったり五人なり」「フアブリスとは國務大臣の家ならずや」「さなり、大臣の夫人はここのあるじの姉にて、わが友というは大臣のよつぎの子なり」

食卓につきてみれば、五人の姫たちみなおもいおもいの粧よそおいたる、その美しさいずれはあらぬに、上の一人の上衣も裳もも黒きを着たるさま、めずらしと見れば、これなんさきに白き馬にのりたりし人なりける。ほかの姫たちは日本人めずらしく、伯爵夫人のわが軍服ほめたもう言葉の尾につきて、「黒き地に黒きひもつきたれば、ブラウンシユワイヒの士官に似たり」と一人いえば、桃色の顔したる末の姫、「さにてもなし」とまだいわけなくもい

やしむいろえ包までいうに、皆おかしさに堪えねば、あかめし顔を汁盛れる皿さらの上にたれぬれど、黒き衣の姫は睫まつげだに動かさざりき。しばしありておさなき姫、さきの罪あがなわんとやおもいけん、「されどかの君の軍服は上も下もくろければイイダや好みたまわん」というを聞きて、黒き衣の姫ふりむきてにらみぬ。この目は常におち方にのみ迷うようなれど、ひとたび人の面に向いては、言葉にも増して心をあらわせり。いまにらみしさまは笑みをおびてしかりきと覚ゆ。われはこの末の姫の言葉にて知りぬ、さきに大隊長がメエルハイムのいいなずけの妻ならんといいいしいイダの君とは、この人のことなるを。かく心づきてみれば、メエルハイムが言葉も振舞いも、この君をうやまい愛めずと見えぬはなし。

さてはこの中はビュロオ伯夫婦もここに許したもうなるべし。イイダという姫は丈高くたけ瘦肉やせじしにて、五人の若き貴婦人のうち、この君のみ髪黒し。かのよくものいう目をよそにしては、ほかの姫たちに立ちこえて美しとおもうところもなく、眉の間にはいつも皺しわ少しあり。面のいろの蒼あおう見ゆるは、黒き衣のためにや。

食終りしよくてつぎの間に出ずれば、ここはちいさき座敷めきたるところにて、やわらかき椅子いす、「ゾファ」などの脚きわめて短きをおおくすえたり。ここにカッフエエ珈琲エエのもてなしあり。給仕のおとこ小盞こさかずきに焼酎しょうちゆうのたぐいいくつかつかついだるを持てく。あるじのほかには誰たれも取らず、ただ大隊長のみは、「われ一個人にとりては『シャルトリヨオズ』をこそ」とてひと息に飲みぬ。この

ときわが立ちし背のほの暗きかたにて、「一個人、一個人」とあやしき声して呼ぶものあるに、おどろきてかえりみれば、この間の隅にはおおいなる鍼はりがねの籠かごありて、そが中なる鸚鵡おうむ、かねて聞きしことある大隊長のことばをまねびしなりけり。姫たち、

「あなあいにくの鳥や」とつぶやけば、大隊長もみずからこわ高に笑いぬ。

主人は大隊長と巻煙草まきたばこのみて、銃獵の話せばやと、小部屋カビネットのかたへゆくほどに、われはさきよりこなたをうち守りて、珍らしき日本人にもものいいたげなる末の姫に向いて、「このさかしき鳥はおん身のにや」とえみつつ問えば。「否、誰のとも定まらねど、われも愛めでたきものにこそ思い侍はべれ。さいつころまでは、鳩

あまた飼いが、あまりに馴れて、身にまつわるものをばイイダいたく嫌きらえば、みな人にとらせつ。この鸚鵡のみは、いかにしてかあの姉君を憎めるがこぼれ幸さいわいにて、いまも飼われ侍り。さならずや」と鸚鵡のかたへ首さしいだしていうに、姉君憎むちよう鳥は、まがりたる嘴はしを開きて、「さならずや、さならずや」と繰り返しぬ。

このひまにメエルハイムはイイダひめのかたわらに居い寄りて、なにごとをかこい求むれど、洩りてうけひかざりしに、伯爵夫人も言葉を添えたもうと見えしが、姫つと立ちて「ピヤノ」にむかぬ。下部しもべいそがわしく燭しよくをみぎひだりに立つれば、メエルハイムは「いずれの譜をかまいらすべき」と楽器のかたわらなる小卓

にあゆみ寄らんとせしに、イイダ姫「否、譜なくとも」とて、お
 もむろに下す指ゆびさき尖とがタステンに触れて起すや金石の響き。しらべ
 しげくなりまさるにつれて、あさ霞がすみのごときいろ、姫が臉けんさい際に
 あらわれきつ。ゆるらかに幾尺の水晶の念ねんじゆ珠を引くときは、ム
 ルデの河もしばし流れをとどむべく、たちまち迫りて刀とうそう槍ひと
 しく鳴るときは、むかし行旅をおびやかししこの城の遠とおつおや祖も
ももとせ百年の夢を破られやせん。あわれ、この少女のこころはつねに
 狭き胸のうちせんせんに閉じられて、ことばとなりてあらわるる便たつきなけれ
 ば、その織せんせん々たる指さきよりほとばしり出ずるにやあらん。た
 だ覚ゆ、糸声の波はこのデウベン城をただよわせて、人もわれも
 浮きつ沈みつ流れゆくを。曲まさにたけなわになりて、この楽器

のうちにひそみしさまぎまの絃いとの鬼、ひとりびとりにきわみなき
 怨うらみを訴えおわりて、いまや諸もろこ声たてて泣きとよむようなる
 き、いぶかしや、城外に笛の音起りて、たどたどしゆうも姫が
 「ピヤノ」にあわせんとす。

弾だんじほれたるイイダ姫は、しばらく心づかでありしが、かの笛
 の音ふと耳に入りぬと覚しくにわかにしらべを乱りて、楽器はこの筐
 も砕くるようなる音をせさせ、座をたちたるおもては、常より蒼
 かりき。姫たち顔見合せて、「また欠唇いぐちのおこなる業わざしけるよ」
 とささやくほどに、外となる笛の音絶えぬ。

主人の伯はカピネット小部屋より出でて、「ものくるおしきイイダが当
 座の曲は、いつものことにて珍らしからねど、君はさこそ驚きた

まいけぬ」とわれに会えしやく釈しぬ。

絶えしものの音わが耳にはなお聞えて、うつつごころならず部屋へかえりしが、こよい見聞きしことに心奪われていもねられず。床をならべしメエルハイムを見れば、これもまださめたり。問わまほしきことはさはなれど、さすがにはばか憚るところなきにあらねば、「さきの怪しき笛の音は誰がいだししか知りてやおわする」とわずかにいうに、男爵こなたに向きて、「それにつきてはひとつく一条だりのもの語りあり、われもこよいはなにゆえか寝いねられねば、起きて語り聞かせん」とうべないぬ。

われらはまだぬくまらぬ臥床とこを降りて、まどの下なる小机にむかい、煙草くゆらするほどに、さきの笛の音、また窓の外にお

こりて、たちまち断たえたちまちつづき、ひな鶯うぐいすのこころみに鳴く
 ごとし。メエルハイムは警咳しわふきして語りいでぬ。

「十年ととせばかり前のことなるべし、ここより遠からぬブリヨオゼン
 という村にあわれなる孤みなしごありけり。六つ七つときはやりの時疫じえき
 にふた親みななくなりしに、欠唇うにていと醜みにくかりければ、かえり
 みるものなくほとほと饑うえに迫りしが、ある日パンの乾きたるや
 あると、この城へもとめに来ぬ。そのころイイダの君はとおぼか
 りなりしが、あわれがりて物とらせつ。もてあそびの笛ありしを
 与えて、『これ吹いてみよ』といえど、欠唇なればえふくまず。
 イイダの君、『あの見ぐるしき口なおして得させよ』とむつかり
 てやまず。母なる夫人聞きて、幼きものの心やさしゆういうなれ

ばとて医師くすしして縫ぬわせたまいぬ」

「そのときよりかの童わらわは城にとどまりて、羊飼ひついとなりしが、た
まわりしもてあそびの笛を離さず、のちにはみずから木をけずり
て笛を作り、ひたすら吹きなろうほどに、たれ教うるものなけれ
ど、自然にかかる音色をだすようになりぬ」

「おとし一昨年の夏わが休暇たまわりてここに来たりしころ、城の一族
とお乗りせんと出でしが、イイダの君が白き駒こますぐれて疾とく、わ
れのみ継つきゆくおり、狭き道のまがり角にて、かれ草うず高く積
める荷車かまにあいぬ。馬はおびえて一躍し、姫はかろうじて鞍くらにこ
らえたり。わがすくいにゆかんとするを待たで、かたえなる高草
の裏にあと叫ぶ声すと聞く間に、羊飼いの童飛ぶごとくに馳はせ寄

り、姫が馬の轡くつわぎわしかと握りておししずめぬ。この童が牧場のいとまだにあれば、見えがくれにわがあと慕うを、姫これより知りて、人してものかずけなどはしたまいしが、いかなる故にか、目通りを許されず、童も姫がたまたまあいても、ことばかけたまわぬにて、おのれを嫌いたもうと知り、はてはみずから避くるようになりしが、いまも遠きわたりより守もることを忘れず、好みて姫が住める部屋の窓のもとに小舟おふねつなぎて、夜も枯草のうちに眠れり」

聞きおわりて眠りにつくころは、ひがし窓の硝子はやほの暗うなりて、笛の音もたえたりしが、この夜イイダ姫おも影に見えぬ。そののりたる馬のみるみる黒くなるを、怪しとおもいてよくみれ

ば、人の面にて欠唇なり。されど夢ごころには、姫がこれにのりたるを、よのつねのことのように覚えて、しばしまた眺めたるに、姫とおもいしは「スフィンクス」の首にて、瞳なき目なかば開きたり。馬と見しは前足おとなしく並べたる獅子なり。さてこの「スフィンクス」の頭の上には、鸚鵡とまりて、わが面を見て笑うさまいと憎し。

つとめて起き、窓おしあくれば、朝日の光対岸むこうぎしの林を染め、そよ風はムルデの河づらに細紋をえがき、水に近き草原には、ひと群れの羊あり。萌黄色もえぎいろの「キツテル」という衣短く、黒き臍すねをあらわしたる童、身の丈きわめて低きが、おどろなす赤髪ふり乱して、手に持ちたる鞭むちおもしろげに鳴らしぬ。

この日は朝の珈琲を部屋にて飲み、午ごろ大隊長とともにグリンマというところの銃獵仲間の会堂にゆきて演習見に来たまいぬる国王の宴にあずかるべきはずなれば、正服着て待つほどに、あるじの伯は馬車を借して階の上まで見送りぬ。われは外国士官というをもて、将官、佐官をのみつどうるきようの会に招かれしが、メエルハイムは城に残りき。田舎なれど会堂おもいのほかに美しく、食卓の器は王宮よりはこび来ぬとて、純銀の皿、マイセン焼の陶ものなどあり。この国のやき物は東洋のを粉本にしつといえど、染めいだしたる草花などの色は、わが邦などのものに似もやらず。されどドレスデンの宮には、陶ものの間というありて、支那日本の花瓶の類おおかた備われりとぞいうなる。国王陛下

にはいまはじめて謁見^{えつけん}す。すがた貌^{かたち}やさしき白髪^{おきな}の翁^{おきな}にて、ダ
 ンテの神^{デウイナ・コメデア}曲^{すえ} 訳したまいきというヨハン王のおん裔^{すえ}なれば
 にや、応接いとたくみにて、「わがザツクセンに日本の公使おか
 れんおりは、いまの好み^{よし}にて、おん身の来んを待たん」などねも
 ごろに聞えさせたもう。わが邦にては旧きよしみある人をとて、
 御使^{おんつか}いえらばるるようなるためしなく、かかる任に当るには、
 別に履歴のうてはかなわぬことを、知ろしめさぬなるべし。ここ
 につどえる将校百三十余人のうちにて、騎兵の服着たる老将官の
 貌^{かたち}きわめて魁偉^{かいい}なるは、国务大臣フアブリス伯なりき。

夕暮に城にかえれば、少女らの笑いさざめく声、石門の外^とまで
 聞ゆ。車とどむるところへ、はや馴れたる末の姫走り来て、「姉

君たち『クロケツト』の遊びしたまえば、おん身もなかまになり
たまわずや」とわれにすすめぬ。大隊長、「姫君の機嫌損じたも
うな。われ一個人にとりては、衣脱ぎかえて憩うべし」というを
あとに聞きなしてしたが、い行くに、ピラミイドのもと園にて姫
たちいま遊びの最中なり。もなか芝生のところどころに黒がねの弓伏せ
て植えおき、靴のさきもて押えたる五色の球を、小槌こづちふるいて横
ざまに打ち、かの弓の下をくぐらするに、たくみなるは百に一つ
を失わねど、つたなきはあやまちて足など撃ちぬとてあわてふた
めく。われも正劍解いてこれにまじり、打てども打てども、球あ
らぬ方へのみ飛ぶぞ本意ほんいなき。姫たち声をあわせて笑うところへ、
イイダ姫メエルハイムが肘ひじに指さきかけてかえりしが、うちとけ

たりとおもうさまも見えず。

メエルハイムはわれに向いて、「いかに、きよようの宴おもしろかりしや」と問いかけて答を待たず、「われをも組に入れたまえ」と群れのかたへ歩みよりぬ。姫たちは顔見あわせて打ち笑い、

「あそびにははや倦^うみたり、姉^{あね}ぎみとともにいづくへか往きたま^まいし」と問えば、「見晴らしよき岩角わたりまでゆきしが、このピラミイドには若^しかず、小林ぬしは明日わが隊とともにムツチエ^エンのかたへ立ちたもうべければ、君たちの中にて一人塔のいただきへ案内^{あない}し、粉ひき車のあなたに、汽車の煙見^{けぶり}ゆるところをも見せたまわずや」といいぬ。

口疾^ときすえの姫もまだなんとも答えぬ間に、「われこそ」とい

いしは、おもいもかけぬイダ姫なり。ものおおいわぬ人の習いとて、にわかに出だししことばとともに、顔さと赤めしが、はや先に立ちていぎのうに、われはいぶかりつつもしたがい行きぬ。あとにては姫たちメエルハイムがめぐりに集まりて、「夕餉^{ゆうげ}までにおもしろき話一つ聞かせたまえ」と迫りたりき。

この塔は園に向きたるかたに、くぼみたる階をつくりてそのいただきを平らかにしたれば、階段をのぼりおりする人も、いただきに立ちたる人も下よりあきらかに見ゆべければ、イダ姫がこともなくみずから案内せんといいしも、深く怪しむに足らず。姫はほとほと走るように塔の上り口にゆきて、こなたをかえりみたらば、われもいそぎで追いつき、段の石をば先に立ちて踏みはじ

めぬ。ひと足遅れてのぼり来る姫の息せまりて苦しげなれば、あまたたび休みて、ようよう上にいたりて見るに、ここはおもいのほかに広く、めぐりに低き鉄欄干をつくり、中央に大なる切り石一つすえたり。

いまやわれ下界を離れたるこの塔のいただきにて、きのうラアゲウイツツの丘の上よりはるかに初対面せしときより、あやしくもこころを引かれて、いやしき物好きにもあらず、いろなる心にもあらねど、夢に見、うつつにおもう少女と差し向いになりぬ。おとめ

ここより望むべきザツクセン平野のけしきはいかに美しくとも、茂れる林もあるべく、深き淵ふちもあるべしとおもわるるこの少女が心には、いかでか若しかむ。

けわしく高き石級をのぼりきて、かお臉にさしたるくれない紅の色まだあせぬに、まばゆきほどなるゆう日の光に照されて、苦しき胸をしずめんためにや、このいただきの真中なる切石に腰うちかけ、かのものいう目の瞳ひとみをきとわが面に注ぎしときは、常は見ばえせざりし姫なれど、さきに珍らしき空想の曲かなでしときにもまして美しきに、いかなればか、なにがし某の刻みし墓上の石像に似たりとおもわれぬ。

姫はことばせわしく、「われ君が心を知りての願ひあり。かくいわばきのうはじめて相見て、ことばもまだかわさぬにいかでと怪しみたまわん。されどわれはたやすく惑うものにあらず。君演習すみてドレスデンにゆきたまわば、王宮にも招かれ國務大臣の

館たちにも迎えられたもうべし」といいかけ、衣の間より封じたる文ふみを取り出でてわれに渡し、「これを人知れず大臣の夫人に届けたまえ、人知れず」と頼みぬ。大臣の夫人はこの君の伯母おぼご御にあたりて、姉君さえかの家にゆきておわすというに、はじめてあえること国くにびと人の助けを借らでものことなるべく、またこの城の人に知らせじとならば、ひそかに郵便に附してもよからんに、かく気けうをかねて希有なる振舞いしたまうを見れば、この姫こころ狂いたるにはあらずやおもわれぬ。されどこはただしばしのことなりき。姫の目はよくものいうのみにあらず、人のいわぬことをもよく聞きたりけん、分い疏わのように語をつぎて、「ファブリス伯爵夫人のわが伯母なることは、聞きてやおわさん。わが姉もかし

こにあれど、それにも知られぬを願いて、君がみ助けを借らんとこそおもい侍れ。この人への心づかいのみならば、郵便もあめれど、それすらひとりいずることまれなる身には、かないがたきをおもいやりたまえ」というに、げに故あることならんとおもいてうべないぬ。

入り日は城門近き木立より虹のごとく洩りたるに、河霧たちそいて、おぼろけになるころ塔を下れば、姫たちメエルハイムが話ききはててわれらを待ち受け、うち連れて新たにともし火をかがやかしたる食堂に入りぬ。こよいはイイダ姫きのうに變りて、樂しげにもてなせば、メエルハイムが面にも喜^{おもて}びのいろ見えにき。

あくる朝ムツチェンのかたをこころぎしてここを立ちぬ。

秋の演習はこれより五日ばかりにて終り、わが隊はドレスデンにかえりしかば、われはゼエ、ストラアセなる館たちをたずねて、さきにフォン、ビュロオ伯が娘イイダ姫に誓いしことを果さんとせしが、もとよりところの習いにては、冬になりて交際の時節来ぬうち、かかる貴人あてびとにあわんことたやすからず、隊つきの士官などの常の訪問というは、玄関のかたえなる一間に延ひかれて、名簿に筆染むることなればおもうのみにてやみぬ。

その年も隊務いそがわしきうちに暮れて、エルベがわ上流の雪消きげにはちす葉のごとき氷塊、みどりの波にただようとき、王宮の新年はなばなく、足もと危うき蠟磨ろうみがきの寄木よせきをふみ、国王のおん前近う進みて、正服うるわしき立ち姿を拝し、それよりふつ

か三日過ぎて、國務大臣フォン、フアブリス伯の夜会に招かれ、オースタリア、バワリア、北アメリカなどの公使の挨拶おわりて、人々こおり菓子に匙をおろすすきをうかがい、伯爵夫人のかたえに歩み寄り、事のもと手短かにのべて、首尾よくイイダ姫が文をわたしぬ。

一月中旬に入りて昇進任命などにあえる士官とともに、奥のおん目見えをゆるされ、正服着て宮に参り、人々と輪なりに一間に立ちて臨御を待つほどに、ゆがみよろぼいたる式部官に案内せられて妃出でたまひ、式部官に名をいわせて、ひとりびとりことばをかけ、手袋はずしたる右の手の甲に接吻せしめたもう。妃は髪黒く丈低く、褐いろの御衣あまり見映えせぬかわりには、

声音

いとやさしく、「おん身はフランスの役に功ありしそれがしが族
なりや」などねもごろにものしたまえば、いずれも嬉しとおもう
なるべし。したが来し式の女官によかんは奥の入口しきいのめで出で、
右手めにたたみたる扇を持ちたるままに直立したる、その姿いとい
と気高く、鴨居柱かもいを欄わくにしたる一面の画図に似たりけり。われは
心ともなくその面を見しに、この女官はイイダ姫なりき。ここに
はそもそもいかにして。

王都の中央にてエルベ河を横ぎる鉄橋の上より望めば、シユロ
ス、ガツセにまたがりたる王宮の窓、こよいはことさらにひかり
かがやきたり。われも数にはもれで、きよようの舞踏会にまねかれ
たれば、アウグスツスの広こうじにあまりて列をなしたる馬車の

間をくぐり、いま玄関に横づけにせし一輛より出でたる貴婦人、
 毛革の肩かけを隨身ずいじんにわたして車箱しゃそうのうちへかくさせ、美し
 くゆい上げたるこがね色の髪と、まばゆきまで白き領えりとをあらわ
 して、車の扉開とびらきし剣おびたる殿守とのもりをかえりみもせで入りしあ
 とにて、その乗りたりし車はまだ動かず、次に待ちたる車もまだ
 寄せぬ間をはかり、槍取やりりて左右にならびたる熊毛整くまげかぶとの近衛このえそ
 卒つの前を過ぎ、赤き氈かもを一筋に敷きたる大理石の階をのぼりぬ。
 階の両側のところどころには、黄羅紗きらしやにみどりと白との縁取りた
 る「リフレエ」を着て、濃紫はかまの袴をはいたる男、項をかがめて瞬またた
 きもせず立ちたり。むかしはここに立つ人おのおの手燭てしよく持つ習
 いなりしが、いま廊下、階段にガス燈用いることとなりて、それ

はやみぬ。階の上なる広間よりは、古いにしえぶり風を存ぞぜるつりしよくだ燭

台いの黄おうろう蠟ろうの火遠く光の波をみなぎらせ、数知らぬ勲章、肩じ

るし、女服の飾りなどを射て、祖先よよの曲画の肖像の間にはさまれたる大鏡に照りかえされたる、いえば尋よのつね常なるなり。

式部官が突きんづさく金きん総づさついたる杖、「パルケツト」の板に触れて

とうとうと鳴りひびけば、天鵝びろうど絨じゆばりの扉一時に音もなくさとあ

きて、広間のまなかに一ひとすじ条の道おのずから開け、こよい六百人と

聞えし客、みなくの字なりに身を曲げ、背の中ほどもきりあ

けてみせたる貴婦人の項、金糸の縫い模様ある軍人の襟えり、またブ

ロンドの高たかまげ髻まげなどの間を王族の一行よぎりたもう。真先にはむ

かしながらの卷毛の大おおかずら仮か髪かみをかぶりたる舎人とねり二人、ひきつづい

て王妃両陛下、ザックセン、マイニンゲンのよつぎの君夫婦、ワ
 イマル、シヨオンベルヒの両公子、これにおもなる女官数人した
 がえり。ザックセン王宮の女官はみにくしという世の噂うわさむなしか
 らず、いづれも顔立ちよからぬに、人の世の春さえはや過ぎたる
 が多く、なかにはおい皺しわみて肋あばら一つ一つに数うべき胸を、式なれ
 ばえも隠さで出だしたるなどを、額越しにうち見るほどに、心待
 ちせしその人は来ずして、一行はや果てなんとす。そのときまだ
 年若き宮女一人、殿めきてゆたかに歩みくるを、それかあらぬか
 とうち仰げば、これなんわがイイダ姫なりける。

王族広間の上のはてに往ゆき着きたまいて、国々の公使、または
 その夫人などこれを囲むとき、かねて高廊えの上に控えたる狙撃そげきれ

連隊れんたいの樂人がひと声鳴らす鼓とともに「ポロネエズ」という舞はじまりぬ。こはただおのおの右手めでにあいての婦人の指をつまみで、この間をひとめぐりするなり。列のかしらは軍装したる国王、紅衣のマイニンゲン夫人をひき、つづいて黄絹すそひきころもの裙引衣すそひきころもを召したる妃にならびしはマイニンゲンの公子なりき。わずかに五十対ついでばかりの列めぐりおわるとき、妃は冠かんむりのしるしつきたる椅子に倚よりて、公使の夫人たちをそばにおらせたまえば、国王向いの座敷なるかるた卓ぶくえのかたへうつりたまいぬ。

このときまことの舞踏はじまりて、群客ぐんかくたちこめたる中央の狭きところを、いと巧みにめぐりありくを見れば、おおくは少年士官の宮女たちをあい手にしたるなり。わがメエルハイムの見え

ぬはいかにとおもいしが、げに近衛ならぬ士官はおおむね招かれぬものをと悟りぬ。さてイイダ姫の舞うさまいかにと、芝居にてひいき鼻屑のわざおぎ俳優みるこちしてうちまも護りたるに、胸にそうびの自然花をこずえ梢のままに着けたるほかに、飾りというべきもの一つもあらぬ水色ぎぬのもすそ裳裾、せまき間をくぐりながらたわまぬ輪を画きて、金剛石の露こぼるるあだし貴人の服のおもげなるをあざむきぬ。

時うつるにつれて黄蠟の火は次第に炭のけ気におかされて暗うなり、燭涙ながくしたたりて、床の上にはちぎれたるうすぎぬ紗、落ちたるはなびらあり。前座敷のビュツフエエにかよう足ようようしげくなりたるおりしも、わが前をとおり過ぐるようにして、小首かたぶけたる顔こなたへふり向け、なかば開けるまい扇おとがいに頤のわたり

を持たせて、「われをばはや見忘れやしたまいつらん」というは
 イイダ姫なり。「いかで」といらえつつ、二足三足ふたあしみあしつきてゆけ
 ば、「かしこなる陶物すえものの間見たまいしや、東洋産の花はながめ瓶びんに知
 らぬ草木鳥獸など染めつけたるを、われにと積ときあかささん人おん身
 のほかになし、いざ」といいて伴いゆきぬ。

ここは四方よもの壁に造りつけたる白石の棚たなに、代々の君が美術に
 志ありてあつめたまいぬる国々のおお花はながめ瓶びん、かぞうる指いと
 きまで並べたるが、乳ちのごとく白き、琉璃るりのごとく碧あおき、さては
 五色まばゆき蜀しよくきん錦きんのいろなるなど、蔭かげになりたる壁より浮うき
 いでて美うわし。されどこの宮居みやゑに慣れたるまろうどたちは、こよ
 いこれに心とどむべくもあらねば、前座敷まへざしきにゆきかう人のおりお

り見ゆるのみにて、足をとどむるものほとほとなかりき。

緋ひの淡き地におなじいろの濃きから草織り出だしたる長椅子に、
 姫は水いろぎぬの裳ものけだかきおお襷ひだの、舞のあとながらつゆく
 ずれぬを、身をひねりて横ざまに折りて腰かけ、斜めに中の棚の
 花瓶を扇のさきもてゆびさしてわれに語りはじめぬ。

「はや去年こぞのむかしとなりぬ。ゆくりなく君を文づかいにして、
 いや申すたつきを得ざりければ、わが身のこといかにおもいとり
 たまいけん。されどわれを煩惱やみじの闇路よりすくいいたまいし君、
 心の中には片時も忘れ侍らず」

「近ごろ日本の風俗書きしふみ一つ二つ買わせて読みしに、おん
 国にては親の結ぶ縁ありて、まことの愛知らぬ夫婦多しと、こな

たの旅人のいやしむようにしるしたるありしが、こはまだよくも考えぬ言ことにて、かかることはこのヨオロッパにもなからずやは。

いいなずけするまでの交際つきあい久しく、かたみに心の底まで知りあう甲斐かいは否いなとも諾うともいわるるうちにこそあらめ、貴族仲間にては早くより目上の人にきめられたる夫婦、こころ合わでもいなまんよしなきに、日々にあい見て忌むこころあくまで募りたるとき、これに添わする習い、さりとはことわりなの世や」

「メエルハイムはおん身が友なり。悪あしといわば弁護もやしたまわん。否、われとてもその直すぐなる心を知り、貌かたちにくからぬを見る目なきにあらねど、年ごろつきあいしすえ、わが胸にうずみ火ほどのあたたまりもできず。ただいとうにはゆるは彼方あなたの親切にて、

ふた親のゆるしし交際つきあいの表、かいな借さるることもあれど、ただ二人になりたるときは、家も園もゆくかたものういぶせく覺えて、こころともなく太き息せられても、かしら熱くなるまで忍びがとうなりぬ。なにゆえと問いたもうな。それを誰か知らん。恋うるも恋うるゆえに恋うるとこそ聞け、嫌うもまたさならん」

「あるとき父の機嫌よきをうかがい得て、わがくるしさいいでんとせしに、気色けしきを見てなかばいわせず。『世に貴族と生れしものは、賤しずやまがつなどのごとくわがままなる振舞い、おもいもよらぬことなり。血の権の贄にえは人の権なり。われ老いたれど、人の情け忘れてりなど、ゆめな思ひそ。向いの壁にかけたるわが母君の像を見よ。心もあの貌かおばせのように厳いつくしく、われにあだし心おこさ

せたまわず、世のたのしみをば失いぬれど、幾百年の間いやしき
 血ひとしづく一滴ほまれませしことなき家の誉はすくいぬ』といつも軍人ぶり
 のことばつきあらあらしきに似ぬやさしさに、かねてといわんか
 く答えんとおもいし略てだて、胸にたたみたるままにてえもめぐらさず、
 ただ心のみ弱うなりてやみぬ」

「もとより父に向いてはかえすことば知らぬ母に、わがこころあ
 かけてなにかせん。されど貴族の子に生れたりとて、われも人
 なり。いまいましき門閥、血統、迷信の土くれと看破みやぶりては、わ
 が胸のうちに投げ入るべきところなし。いやしき恋とにうき身やつ
 さば、姫ごぜの恥ともならめど、このならわしの外とにいでんとす
 るを誰か支うべき。『カトリック』教の国には尼になる人ありと

いえど、ここ新教のザツクセンにてはそれもえならず。そよや、かの口オマ教の寺にひとしく、礼知りてなさけ知らぬ宮のうちこそわが冢つかあな穴なれ。」

「わが家もこの国にて聞ゆる族うからなるに、いま勢いある國務大臣フアブリス伯とはかさなる好よしみあり。このことおもてより願わばいとやすからんとおもえど、そののかなわぬは父君のみ心うごかしがたきゆえのみならず。われ性さがとして人とともに歎き、人とともに笑い、愛憎二つの目もて久しく見らるることを嫌えば、かかる望みをかれに伝え、これにいいつがれて、あるはいさめられ、あるはすすめられん煩わしさに堪えず。いわんやメルハイムのごとく心浅々しき人に、イイダ姫嫌いて避けんとすなどと、おの

れ一人にのみ係ることのようにおもいなされんこと口惜しからん。われよりの願いと人に知られで宮づかえする手だてもがなとおもい悩むほどに、この国をしばしの宿にして、われらを路傍の岩木などのように見もすべきおん身が、心の底にゆるぎなき誠をつつみたもうと知りて、かねてわが身いとおしみたもうファブリス夫人への消しょうそこ息、ひそかに頼みまつりぬ」

「されどこのひとつくだけり一件のことはファブリス夫人こころに秘めて族うからにだに知らせたまわず、女官のけつゐん鬨けつゐん員あればしばしの務めにと呼び寄せ、陛下のおん望みもだしがたしとてついにとどめられぬ」

「うき世の波にただよわされて泳ぐ術すべ知らぬメエルハイムがごと

き男は、わが身忘れんとてしら髪生がやすこともなからん。ただ痛
 ましきはおん身のやどりたまいし夜、わが糸の手とどめし童なり。
 わが立ちしのちも、よなよなともづな纜をわが窓のもとにつなぎて臥ふしし
 が、ある朝羊小屋の扉のあかぬにこころづきて、人々岸辺にゆき
 て見しに、波むなしき船を打ちて、残れるはかれ草の上なる一いっし枝
 の笛のみなりきと聞きつ」

かたりおわるとき午夜ごやの時計ほがらかに鳴りて、はや舞踏の大
 休みとなり、妃はおおのごもりたもうべきおりなれば、イイダ
 姫あわただしく坐をたちて、こなたへさしのばしたる右手めての指に、
 わが唇触るとき、隅の觀兵の間に設けたる夕餉スベエに急ぐまろうど、
 群らだちてここを過ぎぬ。姫の姿はその間にまじり、次第に遠ざ

かりゆきて、おりおり人の肩のすきまに見ゆる、きよ^{はれ}うの晴衣ぎの
水いろのみぞ名残りなりける。

明治二十四年一月

青空文庫情報

底本：「日本の文学 2 森鷗外（一）」中央公論社

1966（昭和41）年1月5日初版発行

1972（昭和47）年3月25日19版発行

初出：「新著百種 第12号」吉岡書籍店

1891（明治24）年1月28日

※修正箇所は「舞姫・うたかたの記 他三篇」（岩波文庫、1981）を参照しました。

入力：土屋隆

校正：小林繁雄

2005年10月5日作成

2006年3月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

文づかい

森鷗外

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>